

ポイント1

神には二つの概念があることを理解する

1・宗教上の神

これは例えばキリストなどをさすが 本来の神 (2) の人間として現れた“化身”である

2・万物を創った“無限の神”

無限だから有限の人間（時間的には寿命・空間的には身体と云う限界がある）は 無限の神の中に存在すると考える。

つまり 無限の神こそ宇宙である。その摂理によって人間は存在している。

3・人間は 地球上に存在して以来 月や太陽あるいは森羅万象を崇めてきた。

キリストや釈迦は それらの化身であり偶像化された者と考えられる。

マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

カトリックは秘跡（生まれた時の洗礼の儀式から死んだときの儀式等）や免罪符で 金を取り それらの儀式を受ければ天国に行けると云う考え方。

プロテスタントは キリスト教は労働することが修行につながると考えた（行動的禁欲）プロテスタントが出てくるまでは この考え方は修道院の中にいる僧だけのものだった。プロテスタントは行動的禁欲を修道院から解放した。大工・鍛冶屋・農民等は 神の御心に沿うと考えた（天職）働くことにゴールはないと考える。

労働はキリスト教の教える隣人愛の実践につながる。他人が欲しがらる商品やサービスを提供すれば それだけ隣人愛を行ったことにもなる（働くことの正当化）

つまり 隣人愛をどれだけ行ったかの指標が利潤（儲け）と考えました。

これらが カルバンやルターの宗教改革の一端です。

（資本主義の精神・資本主義への発展は省略します。）

ポイント6

決議 23-34 で「…利己の欲求と義務およびそれに伴い他人のために奉仕したいと思う感情…」

利己の欲求とは 儲けたいとか あれが欲しいこれが欲しい云々のことでしょうか **義務**およびそれに伴う他人のために奉仕したいと思う感情…」この**義務**の意味が ノブレスオブリージュと同義語だと思えます。（欧米における基本的な道德観）

何故かと云うと 後段の背景により この決議ができたからそう思うのです。

